

# 継之助がくれた「縁」



佐藤さんと蒼一郎くん

皆さんもよくご存じだと思いが、「河井継之助記念館」は市制百周年・合併記念事業として、平成十八年十二月二十七日に河井継之助生家跡に開館しました。開館より市の施設として、私が所属している観光企画課が管理しています。

さて、私が平成二十二年四月に入庁し、記念館の管理を担当してから早七年が過ぎました。今では市役所の職員の中で一番、「河井継之助」に触れていると自負しておりますが、私が継之助の存在を知ったのは、恥ずかしながら今から二十年前の大学生の時でした。

郷土の偉人として継之助や虎三郎、三島億二郎を学校で習った記憶がな

く、小学生の頃に福島江の開発に尽力された桑原久右衛門を授業で習った程度でした。私は大学生の時、硬式野球部に所属しており、四年間、野球部の寮に住んでいました。野球部は部員が百人以上も在籍する大所帯で、その中に一年上の先輩で福岡県出身の梶原さんという、幕末大好きな司馬遼太郎ファンの方がいました。

ある日、梶原さんから「佐藤、長岡出身だってな。それなら河井継之助のこと、当然知っているよな?」と言われ、「えっ、知らないですよ、そんな人」と答えたところ、「お前なあ、長岡出身なのに、継之助のことは、知らないのか? あんな偉人を知らな社会に出た時、恥ずかしいぞ! これから社会に出た時、郷土の偉人ぐらい知らない」と説教され、最後に「お前のために、特別に司馬先生の峠を貸してやるから、よく読んで勉強しろよ!」と言われ、「峠」を渡されたのが、私が継之助を知った

最初のきっかけでした。早速「峠」を読み始めたところ、本当に面白くて、二日で読み終えたと思います。

その後、平成二十一年の新潟国体を契機に長岡市役所に入庁し、観光課（現在の観光企画課）に配属されました。配属初日に当時の係長から突然「峠、読んだことある? 継之助、知ってる?」と言われ、「峠は愛読書ですし、継之助のことはよく知っています」「それじゃ河井記念館を担当して」と言われ、記念館を担当することとなりました。

この七年間、この紙面では書き切れない多くの事がありました。自分が記念館を担当することになった経緯を含めて、人の縁というのは本当に不思議なものであり、大切にしなければいけないものだと感じています。

最後に、長男の名前に「蒼龍窟」の「蒼」の一字をいただき、「蒼一郎」と名付けました。現在、三歳の息子が大きくなったら、私の「峠」の本を渡して、その頃には大河ドラマの主人公となっているはずの「河井継之助」がどんな人だったか、知ってもらえればと思います。

ご来館されるお客様が「河井継之助記念館を見学する為だけに長岡に来ました」「ずっと訪れたいと思っていた場所なので来られて良かった」と話されることがあります。このように話されるお客様は、遠方から来られた方や学生さん、ご年配の方など様々ですが、継之助に対する熱い思いが伝わってきます。テレビでお馴染みの林修先生も継之助を歴史上もっとも尊敬する人物とおっしゃっています。林先生は昨年末にご自身の番組で『大河ドラマにしたい武将』として継之助を挙げていました。継之助の人物像や藩政改革における功績などをわかりやすく、とても熱心に説明されており、林先生の継之助への思いや尊敬が感じとれました。林先生やご来館される方々の継之助愛を聞いて、継之助は人の興味を引く、とても魅力的な人物なのだと思っております。（石原）



佐藤泰輔（さとうたいすけ）プロフィール  
昭和53年、長岡市生まれ  
平成22年に長岡市役所に入庁。  
現在まで河井継之助記念館の担当。

会報 峠 とうげ

河井継之助記念館 友の会会報 第21号 2017.5

編集・発行 河井継之助記念館  
新潟県長岡市長町1丁目1675-1  
〒940-0053  
Tel.0258-30-1525  
Fax.0258-30-1526  
頒布価：50円（送料別）

〈編集人〉 川上 茂 正  
稲川 明 雄 河出 知 美  
大久保 源 輝 柴田 三 枝 子 島岡 真 由 美  
石原 真 紀 白 石 恒 夫  
増田 佳 純

〈構成・印刷〉 高速印刷株式会社

峠抄 ● とうげしょう 20